

【天気予報】

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2012年	11.9	15.6	8.1	66.5
2013年	12.6	16.5	8.6	93.0
2014年	13.3	17.5	9.6	40.0
1981~2010年	13.0	16.8	9.4	75.9

※気温については、1ヶ月の平均値

【作物】

1 小麦・裸麦

- (1) 土壌改良剤
播種前に苦土石灰 80~150kg/10a を施用して下さい。
- (2) 施肥
基肥は、ドリル播栽培でN成分 5.6~7kg/10a (例: しあわせ化成 40~50kg)、全面全層播栽培でN成分 7~8.4kg/10a (例: しあわせ化成 50~60kg) 施用して下さい。
- (3) 適期播種
播種適期は11月中旬ですが、降雨等で土壌水分が高い場合には湿害(発芽・出芽不良)を招くので、気象予報を参考に計画的に作業を進めて下さい。
播種量は、ドリル播栽培で7kg/10a (目標苗立率 150本/m²)、全面全層播栽培で13kg/10a (目標苗立率 200本/m²) 程度です。
なお、播種が遅れる場合は播種量を増量して下さい。
- (4) 湿害対策
播種作業時または作業後に、圃場の周囲及び3~5m間隔に排水溝を設置し、雨水が排水できるようにして下さい。また、排水溝は必ず圃場の外まで導いて、停滞水が排水されるようにして下さい。
- (5) 除草剤の散布
播種直後(雑草発生前)にクリアターン乳剤 500~700ml/10a (または播種後発芽前にトレファノサイド乳剤 200~300ml/10a) を水 100ℓに希釈し、均一にムラなく散布して下さい。

2 水田の土づくり (収量・品質向上対策)

- 急激な環境変化(長雨・干ばつなど)に強く品質の良い米づくりを行うためには、土壌条件を良好な状態に保つ「土づくり」が必要です。
- (1) 有機物の施用
完熟堆肥が望ましく、施用量は目安としてオガクズ堆肥(牛ふん 1,500kg/10a、豚ふん 1,000kg/10a)、乾燥鶏ふん 100kg/10a です。また、稲わらは年内に全量還元しましょう。
 - (2) 土壌改良資材の施用
有機物(堆肥・稲わら)と同時に鉄強化美土里 60kg/10a を施用することで地力向上が図られます。
 - (3) 深耕について
根の分布拡大を図るため、作土深 15cm を目標に深耕して下さい。

<真鍋>

【野菜】

1 ヤマノイモ

ヤマノイモの収穫期を迎えます。庭先選別を徹底して計画出荷を行なって下さい。

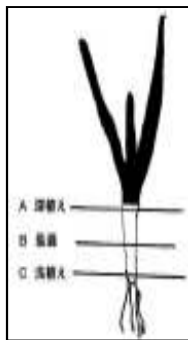
2 タマネギ

晩生品種「もみじ3号」は、11月下旬、株間10~12cm、条間20~25cmで植え付けます。苗は鉛筆以下の太さ(7~8mm)の苗を用います。

植え付けの深さは、根が地表に出ないように注意し、植え付けの深さは2~3cm(右図のBの深さ)程度で土に埋めるようにします。深植えしすぎると翌春の生育が悪くなることがあります。

定植後は、活着を促進するために灌水し土壌を十分に湿らせて下さい。

- (1) 大苗を植えた場合や定植後の高温による過剰生育
- (2) 冬場の窒素不足(施肥が遅れたり、肥料が少なかったり、乾燥や除草剤で根傷み等を起こし植物に吸収されなかった場合)等が考えられますので注意しましょう。



3 ブロッコリー

追肥は、しあわせ化成で40kg/10aで、定植後20日頃、出蕾直前の2回に分けて施用して下さい。

窒素の吸収量は、出蕾期直前に最も高まり、出蕾期以降減ります。蕾が見えてから追肥を施すと、茎内部が空洞となる生理障害の発生を助長し、品質低下につながる恐れがあります。

収穫は、年内どり栽培で気温が高い場合は若どりします。また、花蕾の温度が上がらないうちに朝どりして下さい。

4 キャベツ

春どりキャベツ(3~5月どり)は、昨年度、菌核病が多発しました。原因は、定植以降に曇天や降雨が多かったためです。

定植1~2週間にベンレート水和剤2,000倍。本葉10枚期と結球直前に、ロブラール水和剤1,000倍、または、セイビアーフロアブル20(1,000倍)で、予防散布に心がけて下さい。

<越智>

【果樹】

1 早生温州の収穫

収穫後の腐敗果発生を抑制するとともに、正品率向上と品質均一化を図るため、次のことに注意して下さい。

- (1) 規格外果(大玉果、小玉果、日焼け果、傷果等)の樹上選果
- (2) 品質を見ながらの適期収穫、分割採収
- (3) 果実に傷や強い衝撃を与えないよう、収穫・運搬・選別・出荷まで丁寧に扱って下さい。

2 早生温州の樹勢回復対策

収穫最盛期の約3週間前(11月上旬頃まで)に秋肥を施用します。収穫後は、窒素成分主体の液肥を数回葉面散布し、早期に樹勢回復を図ります。

3 中晩柑類の果実保護

鳥害防止、寒害被害軽減及び退色防止のために、袋をかけて果実を保護します。不知火と甘平は8分着色以上で、せとかは完全着色後に袋をかけ、12月20日頃までに終えて下さい。

<大西>

【花き・花木】

1 ラナンキュラス(球根養成栽培)

本圃の土壌消毒(バスアミド微粒剤)

白絹病の発生が見られる圃場では、必ず土壌消毒を行います。気温が15℃以下になると処理時間が長くなるので、早めに行います。バスアミド微粒剤の施用量は20~30kg/10aで、薬剤施用後は均一に土壌と混和し、散水してビニル被覆します。20日後程度でガス抜きを行って下さい。

2 アネモネ(球根養成栽培)

発芽後の除草

発芽後は、ピンセット等でアネモネの芽、根を傷めないように丁寧に除草して下さい。

3 シキミ

実生(種子)繁殖

10月上旬中に採種した小葉優良系統の成熟種子を、10月下旬~11月上旬に播種します。事前に窒素・リン酸・加里各1kg/a施用し、床幅1m、通路30cmくらいに畝立てした播種床に1m²当たり600粒(10a当たり1ℓが必要)を2~3cm間隔で播種し、細土を1cmの厚さに覆土します。

出芽後、敷草をするとともに寒冷紗により50%程度の遮光を行い、乾燥と鳥害に注意して管理します。翌年3月下旬に掘り上げて移植して下さい。

<日野>

【畜産】

家畜の飼養管理

11月になると夜間の気温が(最低気温)が10℃を下回るようになり、寒さに弱い幼畜には大きなストレスとなります。早めに、すきま風を防ぐなどの防寒対策を実施しましょう。

子豚の寒さによる事故は、出生後1~3日が最も多く、離乳期(4週間まで)までは20℃、3カ月齢で15℃を下回らないよう、保温に心がけて下さい。特に新生子豚は、被毛が薄いうえ皮下脂肪層も薄く寒さに弱いため注意が必要です。また、この時期は、下痢や呼吸器病等に罹りやすい季節ですので、衛生管理にも注意が必要です。

養鶏農家では、渡り鳥の飛来シーズンに入り鳥インフルエンザに警戒すべき時期を迎えました。飼養衛生管理基準に基づき、不備な点を見直し、ウイルスの侵入防止に努めましょう。

表 幼畜の適温域と生産環境限界

畜種	適温域	生産環境限界(低温側)
哺乳子牛	13~25℃	5℃
育成牛	4~20℃	-10℃
育成豚	15~27℃	0℃

<中谷>